

霞ヶ浦滅亡のきざし

高村 義 親

霞ヶ浦というこの豊かにして巨大な湖に関心をもつようになつたのは私が茨大に赴任して釣をやるようになってからです。マコモのしげみに身を沈めるようになって、釣り糸を垂れながら、はるかに出島方面をながめていると霞ヶ浦とは実に素晴らしい湖だと感じられました。釣がきつかけというわけではありませんが、素人のむこうみずで霞ヶ浦を研究してみようと思つてから二年目になります。

短い期間の浅い経験からではあります、霞ヶ浦について理解が深まれば深まるほど表題に書いたような「霞ヶ浦滅亡」というセンセーショナルなことが、近い将来、それもごく近い将来に起るに至ることとして私は思えてならないのです。ここでいう「霞ヶ浦滅亡」とは霞ヶ浦がこの流域に住む私達の生活にかかわりあつて果してきた役割——たとえば農業、漁業、工業、上水道水、リクリエーションそれからそれらとそれら以外のもの

るものものを包摂した生態的役割など目がほとんど一時にして失われることを意味しています。多くの方達は「よもやあの巨大な湖がつかいものにならなくなることはあるまい。」とか「そうなる前に県や国はちゃんと手をうってくれるだろう。」と思つているのではないのでしょうか。しかし、残念ながら霞ヶ浦を滅亡させないための具体的な対策は現在にも実行されていないのです。そして又、この先少くとも数年の間は同様ににも実行されないことが確実に見通しできるのです。それにもかかわらず流入する汚濁物質の総量はふえる一方で、ここ霞ヶ浦には近時次々と滅亡のきざしともいうべき事態がおきています。

鯉が死ぬ!!

七月に入つてからイケスの鯉が次々に一ペンに何百トンという量で死にはじめ大問題になつてきていることは霞ヶ浦滅亡のきざしの一つでしょう。鯉の大量死の原因は酸素欠乏による窒息死といわれています。魚が健康に生育できる限界の水中の酸素量(DO)はワカサギが65 EPM、ゴロ5.6 EPM、コイ4.28 EPM、フナ2.85 EPM、といわれています。

(県内水面試験所の話)。

七月十三日に農学部霞ヶ浦研究グループが調査をし